

第35回宮前地区青少年作品展『絵画の部』講評

この作品展は、宮前地区の子どもたちが自宅や地域の子ども会などで描いた絵が集まる、今年で35回目となる作品展と伺っています。

子どもたちが自ら描きたいと思ってつくられた作品には、自分の「思い」がたくさん表現されていました。子どもたちがどんなことに心が動いてその思いを表現したのかを想像しながら絵を見ました。

絵を描くときには、表現するために技能的な面も当然大切ではありますが、子どもたちの心が動いた「思い」が感じられることを一番大切に考え、審査しました。自分の「大好き」「うれしい」「できた」「たのしい」「わあすごい」「こんなことがあったらなあ」という「思い」の溢れている素晴らしい作品の数々が見られました。

新型コロナウイルス感染症の拡大を防止しながらの新しい生活様式の中でも、自分、家族、自然、動物、思い出などのテーマで描かれた子どもたちの絵からは、心温まる子どもらしい瑞々しい感性が感じられました。本当に子どもたちの絵の素晴らしさを改めて感じるができる作品展でした。

来年もまた、このように子どもたちの心が動いた「思い」がいっぱいまつた作品が、たくさんつくられることを願っています。

審査員 川崎市立宮崎小学校 教頭 藤原 由布子